藝術には創作の面と觀照の面がある。造形美術の場合にはこの二つの面はいずれも視覺を離れ得ず、美術は視覺の藝術である。視覺とここに言うのは單に感覺器官としての視覺ではなくて我々が作品を見る目であり藝術家が對象を見る目であり視覺である。上代佛像の彫刻家が、多分佛師が現實の對象をモデルとして使用したと想像することは妥當でないと考えられる。我が彌勒菩薩像においては、モデル的な、人間の生まな表情は全く感じられない。しかも佛像彫刻と雖も現實の人體のもつ肉附けとか各部の比例を過度に無視することは美の破壞に過ぎないのであるが、廣隆寺彌勒像に於いては人體そのままの優美な姿に表現されている。この製作に當つては、作家は恐らく現實の人體から得た體驗や、手本となるべき優れた諸佛像から學んだ多くの蓄積を所有していたに違いないと想像される。かくて十分に熟達した作家が機會を得て製作活動に入いる場合、佛師であるこの作家は適當な素材（この彌勒像に於いては松材と言われている。）を前にして、熟達した視覺が佛師の頭中に畫く處の表象に從つて鑿で素材の中から佛像の形を刻み出して行く。その完成に到る途上に於いては、素材に與えられた形式が再び作家の視覺を通してその表象に反映して絶えず微妙な變化、修正が生じ、その反復される處に作家の視覺が藝術家の生命として實現されて行き、その結果として生み出だされた藝術作品はこの時作家から離脱して獨立の存在となる。

これを觀照の面から見ると、藝術作品はそれを見るものに對して對象として働きかけて來る場合、このことは同時に、見るものの視覺が對象の上に働きかけていることである。視覺が作品に美を見出すことは、見るものの、中に美の表象を畫くのであつて、その美の表象が我々の心を樂しませ、快感を呼び起こすのであるが、視覺が純粹になり高められるに從つて美の表象も作品の眞の美をより良く畫き出して一層深く我々の生命の奥所に訴えるに到るのである。藝術美がかかる働きを持つことは我々人間の本性が天賦の素質として美に對する感受性を與えられているからであると考えざるを得ないのである。このように考えることが出來るとすれば、我々の視覺は低い段階から高い域に登るに從つて終いに作家の視覺に迫つて、作家の視覺と匹敵し得る境地に到達することも可能となる。藝術を眞に理解するには藝術家と同じ高さ迄登らなければならないと言われているのはこのことを意味すると言えよう。すぐれた藝術が人間を高め或は人の心を深めるわけである。深い信仰の所産であるすぐれた佛像の美も同樣であること勿論である。

親鸞の宗教的理念とその追求的形態

短期大學
部教授　日野　環

講題に掲ぐるが如き思念が私に生來した緣由を述べねばならぬ樣である。

信州の松本の正行寺に『阿彌陀如來名號德』と題號する鎌倉時代の古寫がある。それは本學の教授で私どもの先生であられた故山田文昭師によつて發見され、かつ親鸞聖人の眞撰の聖教として學界に承認されたものである。この事は故先生の幾多の

業績のうちでも尤も大きな功績の一つであると信ずる。

此古寫本は粘葉綴で、縱二五・七糎、横一五・七糎、全十一紙、半面六行、一行十五・六字乃至十七・八字の行格をもつものである。漢字には凡そ振假名が付され稀に左訓があつて、切句點がうたれてをる。この切句點と左訓は朱書である。なほ此古寫本の現狀を見るにそれは完本ではなく、墨附十一紙でその間すくなくも三ヶ處の落丁及切斷が一ヶ處あると推測され得る。このため文章義脈は切斷されて完全なる內容の全貌は窺ひ難い。他にその轉寫本の發見を得てその缺失を補ひ得ばやと切に思ふところである。而し現在では、他に別本を見ない文字通りの天涯の孤本である。しかもこの『名號德』（正行寺）は宗祖の選述として最後の撰述年時の記入を見る著書であるところに魅力を持つのである。この述作は「法然聖人御說法事」（西方指南鈔）・信微上人御釋（宗祖自筆傳寫）の影響のもとに制作された事であらふ。內容を管見すれば彌陀如來の十二光の德用を述釋してそれを無碍光と不可思議光とに結釋し、この光の光被のもとに他力の信を得べき事を述べて無量光明土に生れんことをすゝむるのである。しかしその內容は文章義脈の上では前述の如く數ヶ處の落丁切斷によつて斷層があり、依て祖聖最晩年の選述として限りなきやるせなさを吾等の胸奧に呼び起すのである。

昭和三十年の八月に三河矢作の上宮寺に參向した。其折に數々の寺寶を拜見する機を得たことであるが、その寺寶の中に次に示すが如き聖敎の斷簡が小さな幅物に仕立てられてをるのに遭遇した。私はその時、これは信州松本の正行寺の『名號德』の斷簡の一つであると直感した。この筆蹟は絕對に『名號德』と同一である。その聖敎の書寫の樣態も全く同一である。料紙の幅員は表裝の時に多少切斷されてあるかに思はれたが、その質は同一と見えた。これ等の點では一應問題はないと思ふ。問題は次の二點にある。第一はいまこの斷簡は正行寺の『名號德』缺失せるいづれの場所へ挿入してみても文脈がつゞかぬ事である。しかしそれはこの斷簡の前後になほ若干の缺失した部分があつたと考へてよい。『名號德』の現狀はかく考へてよい狀態にある。第二の問題は上宮寺のこの斷簡に見ゆる宗義の內容が十二光の述釋にすぎぬかに見ゆる正行寺の『名號德』の內容を成さねばならぬか。かくの如き敎義上の問題である。これと關連してこの上宮寺の斷簡が『名號德』の內容としてそれが置かるべき場についての疑問である。この解明のために、茲に講題として揭げた「親鸞の宗敎的理念とその追求の形態」といふことの檢討の必要が生じたのである。そこで上宮寺の聖敎の斷簡とは如何なるものか。今ここにそれを揭げることにする。

『上宮寺藏聖敎斷簡』

淨土論ニ・アラハシ・タマヘリ・イフ諸佛咨嗟（シヤウトロン）ノ・願ニ・大行アリ・大行ト・イフハ・无导光佛ノ・御名ヲ・称スルナリ・コノ行・アマ子ク・一切ノ・行ヲ攝ス・極速・圓滿（コトハヤキヨ ハスコロヒモ）セリ・カルカユヘニ・大行トナツク・コノユヘニ・ヨク・衆生ノ・一切ノ无明ヲ破ス・マタ・煩惱ヲ・具足セルワレラ・无导光佛ノ・御チカヒヲ・フタ・コヽロナク信スルユヘニ・无量光明土（ホウシンホウトウイフナリ）ニ・イタルナリ・光明土ニ・イタレハ・自然ニ・无量ノ德ヲエシメ・廣大ノ・ヒカリヲ・具足ス・廣大ノ・光

ヲ・ウルユヘニ・サマミミノ・サトリヲ・ヒラク也」

いまこの斷簡の內容を檢討すると、先ず十七願から「大行」を導びき出して大行の德用を述べ、この願の誓ひを信ずる「信」を明してさらに、この行信の證果としての无量光明土への往生を述べ、その往生の果後の利益を累說してをる。すなはち約言すれば「大行」「大信」「證果」を述べるのである。しかも「大行」の釋相は『略文類』そのままと云つてよい。さらに注意すべきは「イフ・諸佛咨嗟ノ願ニ大行アリ」とあるこの「イフ」なる言葉を如何に解釋するかの見通しである。これは親鸞自らがその『略文類』の大行釋に釋述した言葉をさして「イフ」と書いたものと思ふのである。從つて以下ひきつゞいて述べられるこの『名號德』の大行に關する釋相は『略文類』の和譯・延書の感がある。第十七願が「諸佛稱名ノ願」と稱されをるもその實證の一つであらふ。かくて課題は少しく今問題としてをる點とは異るが、ついで乍らこの機會に云へば『略文類』と『名號德』との時間的距離は、廣文類と『名號德』との時間的距離より短いと思ふ。「廣」前「略」後と思はれるのである。とにかく上宮寺の「聖教斷簡」には「行」「信」「證」證果の「利益」が簡結明了に述べられてをる。若しこの上宮寺の斷簡を『名號德』の內容としてそれ等を通貫して見るならば『名號德』は「名號」の名に於て「光名」―「大行」―「大信」―「證果」―「利益」が述べられてをると見られることになる。この『名號德』なる聖教を釋相から見るならば「彌陀如來光明德」とでも題號さるべき趣がある、それが「彌陀如來名號德」と題號されたところに、すでに親鸞的な感覺と、その內容配列の獨自的な角度を感知すべきである。

殊にその第一无量光より第六智慧光にいたる六光の釋は法然上人の釋とほとんど同一であり、第七無對光より第九不斷光にいたる三光は、ほとんど文字に卽するそのままの釋述にすぎぬのであるが、これ等が次に來るべきものに導入され、それを迎へ受けとるそのものには必ず親鸞的なるものが待ちもうけてをり、これに結び付くことによつて、新なる光釋を放つべきことを徹見すべきである。

ところで我等の宗祖親鸞はいつ宗教的に誕生したか。それは「建仁辛酉曆」であることは聖人の自から記するところである。然れば如何に誕生したか。それは「棄ニ雜行一兮歸ニ本願一」である。「歸本願」を「ただ念佛して」と受け取つた。これが宗祖親鸞の誕生である。今生を基盤として久遠の宗教的理念を念佛しての「教」に於て受けとつたのである。この念佛の實踐に於ける本願の追求が自然にその本質の眞實を顯したものが二廻向四法である。この信體驗の生活がいつしか眼を開いた「信感覺」が感じ取つた形態それが、「光號兩重因緣釋」に於て示されたものであり「正信偈」の依經段に孕まれるものである。すなはちそこでは「重誓名聲聞十方」を起點として十二光が述べられ、それが「一切群生蒙光照」と示された三十三願の願心を通じて光明を「願力」に轉じて「本願名號正定業・至心信樂願爲因・成等覺證大涅槃・必至滅度願成就」と行・信・證・證果の往生の因果を結實せしむることを現してをる。かくて「重誓名聲聞十方」にこたえて「如來所以興出世・唯說彌陀本願海」なる教主世尊の應現が示され「一切群生蒙光照」を法緣と

して「五濁惡時群生海・應信如來如實言」なる宿善の開發が發起して來る。この「聞其名號」に於ける「能發一念喜愛心」なる「信體驗」が「棄雜行兮歸本願」のそれなのである。かくて親鸞にあつては、「本願」とは「本願の信」のことであり「本願の名號」とは「名號の行信」のことである。かくて「本願の名號」も「至心信樂」もこれに先行する「普放无量无邊光……超日月光照塵刹・一切群生蒙光照」なる大悲の光明の法緣のもたらすところであつて、この光明たるや「重誓名聲聞十方」なる大悲の願心より發起するところである。この故に「信體驗」は至近の敎言によつて開顯せられるがその發起するところ悠遠なる名號成就の願心にある。この悠遠なる願心が「今」に結ばるるところ、茲に願心の成就があるのである。この趣を頂戴せしめられたものが「信卷」別序の冒頭の二對の金言であらふ。かくてこの信體驗は、光號の因緣を通じて愈々无量壽如來に歸命し不可思光に南無しつゝ无量光明土への道に置かれて无量光明土に歸つてゆくのである。かくて「行」も「信」も「證」も光明のうちに置かれ、それに攝められそこに浮んでをる。この趣きが鮮かに示されたものが次に引用する「行卷」の「乘ニ大悲願船一浮ニ光明廣海一」の聖言であり上宮寺の聖敎斷簡の趣旨でもある。親鸞の宗敎――本願の宗敎は――いま當面の課題に必要な範圍に限定すれば――光明・行・信・證・證果を感覺する形態に生きしめらることであるかの如くである。本願の信の生活は――本願の追求は、その感覺を光明・名號・信心・證果を感知せしめられる形態に置かれた事であることを物語る――これがすべての親鸞的なるものゝ玄底に流れ生けるものであると思ふ。親鸞の選述はあるひは隱に、あるひは顯にこのものズバリを、あるひは或角度に於ける或面を顯彰し、顯彰せむと試みたものであるかの如くである。

前に揭げる上宮寺の聖敎斷簡は、大行をあげ信・證・證果を述べて、无量光明土にいたるとのべ、その利益功德をのべて――廣大のひかりを具足す、廣大の光をうるゆへにさま〳〵のさとりをひらく也とすべて光のうちに浮び滿々たる光に包まれて述べられてをり、行卷に「爾者乘ニ大悲願船一浮ニ光明廣海一至德風靜、衆禍波轉、卽破ニ無明闇一速到ニ無量光明土一澄ニ大般涅槃一遵普賢之德也」と述べられてをることゝ全く一ツであることを知らしめられる。

かく窺ひ來れば、十二光の德用を述べて始中終光明に包まれた釋相をもつ正行寺の『名號德』と上宮寺の聖敎斷簡とは同一の基底に立ち同じ性格と表現の樣態を持つものである。是によつてこの二者は互に相ひ補ひ以て一ツの聖敎を構成するものと見なし得ると思ふ。

ところで正行寺の『名號德』の現在の狀態は不完本であり、內容の義脈に斷層のあることはすでに述べたが、現在あるがままなる內容をもう一度ふり返つて見ると、幾度かの斷續の姿ながらそれを縫うて一應十二光の德用が述べられ、それが無碍光と不可思議光に綜合され。また次に若干の落丁缺紙による斷層を距てゝ、終結の記述になつてをるのである。その終末の記述は次の如くである。――「自力ノ行者オバ、如來トヒトシトイフコトハアルヘカラズ、オノ〳〵自力ノ心ニテハ、不可思議光佛ノ土ニイタルコトアタハズト也、タヾ他力ノ信心ニヨリテ、

不可思議光佛ノ土ニイタルトミエタリ、カノ土ニムマレムトネカフ信者ニハ、不可稱・不可說・不可思議ノ德ヲ具足ス、コヽロモオヨバレズ、コトバモタエタリ、カルカユヘニ、不可思議光佛トマフストミエタリトナリ

南无不可思議光佛」―(以上)

この結末の記述を今のこの斷層をへだてゝこれの前にある記述と對校檢討してみると、この二部の文脈義脈を距てるこの斷層はこの他のいずれの斷層よりも深くして重大な事に氣づくのである。この終結の記述の文義を注意すると「自力ノ行者オバ如來トヒトシトイフコトハアルベカラズ」「自力ノ心ニテハ不可思議光佛ノ土ニイタルコトアタハズト也」「他力ノ信心ニヨリテ不可思議光佛ノ土ニイタルトミエタリ」「カノ土ニムマレムトネカフ信者ニハ不可稱不可說不可思議ノ德ヲ具足ス」と述べてある、すなはち「自力ノ行者」「自力ノ心」に對して「他力ノ信心」「カノ土ニ生レムトネカフ信者」をあらはし、「自力ノ心」に對して「他力の信心」が「自力ノ行者」に對して「カノ土ニ生レムトネカフ信者(他力ノ信者)」が相對して示されてある。かくて「如來トヒトシ」(等正覺・住正定聚)及「不可思議光佛ノ土ニイタル」(滅度・往生)が自力に於て否定され、他力に於ける肯定が反顯されてをる。すなはち自力他力相對して「行」「信」「證」が述べられてをるのである。而して最後奥書とも云ふべき位置に「南无不可思議光佛」と所歸の尊號を掲げて「名號德」終正符としてあるのであるが、その尊號に左訓して、「南无・ナムハチエナリ」「不可思議・フカシキハリナリ」「光佛・クワウフチハキヤウナリトシルヘシ」とある。

南无不可思議光佛とは理知冥合不二の境涯であり、まさに眞佛土の風光を顯すかの如くである。かく窺ひ來るとこの終結の述文は上宮寺の聖教斷簡と一連に流通する義脈と性格を持ち、上宮寺の聖教斷簡を以て、いまのこの斷層を埋めその中間の何等かの場に置くならば、この『名號德』の最後に飛び超し難い溝として横つてをる文脈及義脈の上の斷層に或る通路を感ぜしむるものが見出せるのではなからふか。かくすることによつて『名號德』は「光明」「大行(名行)」「大信」「證果」なる親鸞の信體驗に於ける宗教的感覺が感知し表現した本願追求の根本的な形態を、はからずも具現してをつた事を見出す事になるのである。この見解が許さるゝならば、上宮寺の斷簡は、『名號德』の宗教的・教義的に尤も重要な極軸をなす部分の斷簡であつたわけである。かくて聖教として焦点を失つて締りなく中心理念を缺いて、單に十二光の說明的解釋の書として見らるゝおそれもあり、畫龍點睛を缺くうらみのあつた『名號德』が、親鸞の選述として親鸞的性格の光彩を發輝し聖教として本願力を以て塵刹を光被し、我等に迫るであらふ。